# CIVIC FORCE

## NEWS LETTER Vol.9

ニュースレター （Sep, 2016）

初めて見る鰹（カツオ）の解体作業に興味津々の学生たち。「夢を応援プロジェクト」夏休み特別プログラムでは、気仙沼（宮城）の海で泳いだり生き物を観察したほか、川や森にも出向き、森と海、里のつながりを学びました。

■Contents

P2　被災地を支援する
【東日本大震災】
・4 泊 5 日の夏休み特別プログラム

【熊本地震】
・避難所から仮設住宅へ
・熊本版「NPO パートナー協働事業」

P7　アジアに展開する
・A-PAD バングラデシュ：
洪水被害の村で医療支援

P7 緊急即応体制を創る
・静岡県袋井市の防災倉庫移転

ほか

発行日：2016 年 9 月
発行　：公益社団法人 Civic Force
〒151-0063 東京都渋谷区富ヶ谷 2-41-12
富ヶ谷小川ビル 2 階
TEL　：03-5790-9366
e-mail ：info@civic-force.org
URL　：http://www.civic-force.org

## 相次ぐ自然災害から身を守るために

東日本大震災から 5 年半、そして熊本地震から 5 カ月以上が経ちました。日本は地震だけでなく台風などの災害も多く、今夏には度重なる台風が各地で大きな被害をもたらしました。

自然災害を止めることはできませんが、被害を最小限にとどめるためには、どうすればいいのでしょうか。防災心理学には、人間は「自分だけは大丈夫」と自身に認知させようとする心があると言われますが、根拠のない安全神話は捨て、常に「今ここで災害が起きたらどうすればいいのか」とイメージしておくことが必要です。

また、一つの災害だけを基準にした防災対策は危険です。1995 年の阪神淡路大震災では家の下敷きや落下物が原因で命を落とした人が多かった一方、東日本大震災では主に海岸沿いの津波と原発事故の 2 つの危険性が注目されました。局所的な災害だけでなく、長期のインフラ断絶をもたらす広域的で大規模な災害に、総合的に備えていかなくてはなりません。

この夏、Civic Force は、東日本大震災支援「夢を応援プロジェクト」の一環で、森と海のつながりや自然と対峙した防災の大切さ、東北の復興の現状などについて学ぶ夏休み特別体験プログラムを実施しました。今月のニュースレターでは、このプログラムのご報告とともに、熊本の被災地や支援活動の現状などについてご報告します。

# 被災地を支援する

東日本大震災や熊本地震の支援活動をはじめ、日本各地で発生する災害時の緊急支援活動についてお知らせします。

東日本大震災

## 4 泊 5 日の夏休み特別プログラム

東日本大震災で被災した学生たちをサポートする「夢を応援プロジェクト」の一環で、8 月 21 日から 25 日まで、4 泊 5 日の夏休み特別プログラムを実施しました。今年で 4 回目を迎えるプログラムには、宮城県出身の大学生が参加しました。

## 東北の漁師に学ぶ 森・里・海のつながり

プログラムの舞台となったのは、漁師町として知られる宮城県気仙沼市と、緑豊かな田園風景が広がる岩手県一関市で、海と山の両方を拠点に、海・里・森のつながりについて学ぶ濃密な時間を過ごしました。コーディネート役は、環境教育・森づくり・自然環境保全の分野で活動する NPO 法人「森は海の恋人」副理事長の畠山信（まこと）さん。また、京都大学の学生・大学院生約 10 人も参加し、自然にどっぷりつかりながら交流を深めました。

1 日目は森は海の恋人の活動や東日本大震災当時の被害の様子、被災した地域の復興状況などについて聞き、災害時に生き残るための術として「火おこし」も体験しました。

翌日には、ボートで海の上へ。イカダに吊るされたロープを引き揚げ、ホタテの殻に付着した牡蠣や周辺の生き物を採取。それらを顕微鏡で観察しながら、畠山さんは「海水をいっぱい吸って成長する牡蠣は海中のプランクトンを栄養分にしている」と、海で生きる生物や地球上の生態系について、そして人間も食物連鎖の中にいることを解説しました。

a

b

c

d

e

f

g

a–b 唐桑半島西部に位置する「九九鳴き（くくなき）浜」は指定文化財・天然記念物に指定されている
c 舞根の海に飛び込む学生たち
d プログラムでは川の上流や森へ足を運び、森は海の恋人運動の意味やダム建設阻止の歴史、漁業者と林業者のつながりについて学んだ
e 4 日目の夜、アナゴ釣りへ
f 寺社を訪れ、地域の文化や歴史に触れる
g 高台にできた仮設住宅や震災後にできた干潟を前に、語りかける畠山重篤さん

a 森は海の恋人運動に長年携わってきた地域の人に話を聞く
b 被災後、 地域の復興に取り組む三浦さんの講話
c 車座になって、 5 日間で学んだことを振り返る学生たち
d-e 震災後に建設された防潮堤を見学し、 学生たちは国の復興計画や地域主体の復興まちづくりの難しさを知った
f 森は海の恋人が研究者とともに続ける生態系調査にも協力
g 海と森のつながりを学んだ後、 植樹に挑戦

また、 森は海の恋人理事長で漁師の畠山重篤さんは「豊かな海の背後には、必ず豊かな森と川がある」と学生たちを連れて山へ。

昭和 40～50 年代に赤潮が発生したのを機に気仙沼湾に注ぐ大川の源流に広葉樹を植える活動を始めた重篤さんは、 大川の下流から上流へ、そして室根山の頂上まで車で移動し、 森と海、それを結ぶ川、 河口の汽水域に生きる牡蠣とのつながりや植樹活動について語ってくれました。 そして、 平成元年に始まり、 毎年全国から多くの人が訪れる植樹祭の舞台である室根山に登り、 全員で苗木を植樹しました。

## 東日本大震災と復興の“今”を学ぶ

プログラムでは、 震災直後の避難生活や震災後のまちづくりについて聞いたり、 海岸沿いで建設中の防潮堤を訪れるなど、 被災地の復興の様子について学ぶ機会もありました。

畠山さんとともに、 気仙沼の復興まちづくりに取り組む三浦友幸さんは、「実は震災が起きる前は、まちづくりなんて全然興味がなかった」と言います。 三浦さんは、 気仙沼に生まれ育ち、 3 月 11 日の東日本大震災では、市内の勤務先で被災。自宅近くの寺院が避難所になり、 復興対策本部の事務局長を務めることになったそうです。 その後、NPO のスタッフとして、 津波で流された地域の集会場の再建などコミュニティーを再び取り戻す活動に奔走してきました。 また三浦さんは、 海岸沿いに建設されている防潮堤建設計画に対し、 地域で署名を集めるなどして大谷海岸を守る活動にも尽力してきました。

発災直後の状況から地域再建に向けた道のりを奨学生たちに話し終えた三浦さんは、「震災を経験した人にしか分からないこともあるけれど、 被災地を訪れたり、 被災した人の経験を聞くことで、 それを次に生かしてほしい」とメッセージを送りました。

VOICE

## 被災した地域の出身として

「豊かな海は
きれいな森によって
育つと知りました」

東北福祉大学 2 年
木村 朋広 さん
（宮城県・女川町出身）

「山と海の関係性を知り、知識を深めたいと思って参加しました。プログラムでは、山から川、里を通って運ばれる海の水の豊かさは、きれいな森によって育つと聞き、漁業や農業、林業、そして私たちの日々の生活と深く関係していることを知りました。また、いろんな高さや形をした防潮堤を見て驚き、物事をいろんな角度から見る大切を学びました。京大生と一緒に海に入ったり山に登って交流できたことも良かったです。これからの学生生活もいろんな経験をしたいです。そして、将来は救急救命士になろうと考えています」

東北文教大学 2 年
今野 靖子 さん
（宮城県・桶谷町（旧南三陸町）出身）

「生まれ育った南三陸町の隣にある気仙沼の復興の様子を知りたくてプログラムに参加しました。防潮堤の問題や、森と海との関係などについて知り、人のつながりの強さや大切さを改めて感じています。復興の様子を直接見たり聞いたりしたことで、複数の視点で物事を捉え、自分の考えを深めることにもつながりました。植樹や夜釣り、さばいたばかりのカツオを食べたことも貴重な経験です。被災した地域の出身として、これからも移りゆく被災地の情報に耳を傾け、地域の復興にかかわっていきたいです」

### 【東日本大震災支援】「夢を応援プロジェクト」とは

「夢を応援プロジェクト」は、震災によって経済状況が急変、悪化し、就学継続が困難な状況にある被災地の高校生が社会人になるまでの最長 7 年間（2019 年 3 月末まで）、月額 3 万円の奨学金を給付するとともに、東北の復興に貢献したいと考える若者をサポートする教育プログラムを実施しています。

◆Civic Force では引き続き奨学生のための募金を受け付けています。ウェブサイト「寄付・支援」のページから寄付できる「オンライン募金」のほか、以下の口座にて、皆様のご支援を受け付けています。また、全国のローソングループ店舗で「夢を応援基金」の募金を受け付けています。

【「夢を応援プロジェクト」へのご寄付（東北指定寄付）】

銀行名　三井住友銀行　青山支店　普通
口座番号 7086642
口座名　公益社団法人 Civic Force（シャ）シビックフォース）
※「夢を応援プロジェクト」へのご寄付につきましては、同プロジェクトのうち、教育プログラムの実施に使用させていただきます。奨学金には使用されませんので予めご了承ください。

熊本
地震

## 避難所から仮設住宅へ

4 月 14 日の地震発生から 5 カ月半が経った熊本では、各地で仮設住宅の建設が進められています。熊本県内では 16 市町村に建設予定の 4294 戸中、9 月 29 日までに 3855 戸が完成。本震直後、県内 855 カ所の避難所に最大で 18 万が避難していましたが、9 月末現在の避難者数は 500 人を下回り、多くの人が避難所を出て自宅や新居などでの生活を始めています。

特に被害が大きかった益城町でも、町内 18 カ所 1562 戸の仮設住宅の建設が進められており、9 月末現在、1429 戸の建設が完了しています。緊急支援チーム（Civic Force ／ A-PAD ジャパン／ピースウィンズ・ジャパン）が運営する「ユニットハウス村」も、ピーク時の 7 月中旬には 46 世帯 118 人が暮らしていましたが、9 月末現在は 13 世帯 27 人に減りました。

## 「ユニットハウス村」運営を継続

ユニットハウス村は、仮設住宅や「みなし仮設」など次の住処へ移行するまでの“つなぎ役”として、当初は 8 月末までの運営を予定していました。しかし、建設業者が多忙を極め、壊れた自宅の修繕が終わらなかったり、仮設住宅への入居が決まらないなど、現時点で行き先のない世帯の方もいるため、入居期限を延長しました。

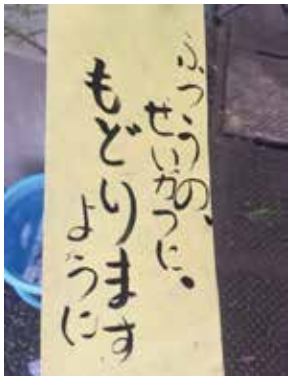
ユニットハウスから転居ができない理由は様々ですが、中には今なお余震が続く影響で、「子どもが建物内で過ごすことを怖がるため自宅に戻ることを躊躇している」という家族もいます。私たちは、このような事情を抱えた皆さんの悩みや不安を聞きながら、できるかぎり丁寧に応対するよう心がけています。

## 全国のボランティアの皆様とともに

ユニットハウス村では、今夏、七夕まつりや納涼祭などのイベントを実施したほか、薬剤師や炊き出しボランティアの派遣など県内外の皆さんとともに避難者の方の生活をサポートしています。避難者同士やボランティア間での交流も生まれており、すでに新しい生活を始めた人が差し入れを片手に様子を見に来てくれる場面もあります。

70 代の女性は「発災直後の大変なときも雨風から守られた生活ができた。これからの生活再建は大変だけど、これまで支えてくれたからこそ今がある。本当に感謝している」と話してくれました。

6 月から設置・運営を続けてきた「ユニットハウス村」では、炊き出しや陶器市、子ども向けのイベントなど全国から駆けつけてくれたたくさんのボランティアの皆さんとともに、様々な取り組みを行いました



熊本
地震

# 熊本版「NPO パートナー協働事業」スタート

Civic Force は地域の復旧・復興をサポートするため、2016 年 6 月から「パートナー協働事業」を実施しています。 被災地で活動する団体とともに、 緊急支援では行き届かなかったニーズに広く対応するこの仕組みは、 東日本大震災をきっかけに生まれ、 熊本では現在、 3 団体とのプロジェクトを実施中です。

## まちづくり　被災地 NGO 協働センター

西原村で災害ボランティアセンターの運営サポートを続ける被災地 NGO 協働センターは、 地域の人々や建築・土木などの専門家と協力しながら、 壊れた家屋の片付けを続けています。また、 避難所などでの足湯ボランティアを派遣するコーディネーターの役割も担っています。

6 月からは、 中長期的な地域復興を後押しするため、 地元で生まれた団体「わかば meeting」が主催する定期会合のサポートを通じて、 集団移転や移転先の新しい地域づくりの後押しをしています。また、住民向けフリーペーパー『DOGYAN（どぎゃん）』を発行し、 避難生活の注意点や地域の魅力を再発見できるような情報を発信しています。 8 月からは、 保健師や理学療法士と連携し、 仮設住宅に手すりを設置するなど一人一人のニーズを拾いながら丁寧なサポートを続けています。

## 女性支援　熊本こども・女性支援ネット

子どもや子育てに特化した支援活動を展開するネットワーク組織「熊本こども・女性支援ネット」は、 子育て中の母親の相談を受け付ける団体や心のケアを専門とする組織など様々な取り組みを続ける支援者が互いに情報交換できるよう、 月に1回、「連絡会」を開催しています。

また、 6 月から毎月、 震災の影響を受けた子どもたちのトラウマケアを目的とした「ハグプロジェクト」や、 被災した子どもたちが自然と触れ合いながら体を動かす「森の教室プロジェクト」を実施しています。

NPO パートナー協働事業では、 当団体へのサポートを通じて、 熊本での辛い体験をこれからの人生を生きる力に変えようと奮闘する方々を支えていきます。

## まちづくり　通潤橋応援プロジェクトチーム

全国でも珍しい石造単アーチ橋「通潤橋」は、 熊本県上益城郡山都町のシンボルであり、 現役の農業用水として江戸時代から活用されてきました。 国の重要文化財としても知られる通潤橋は、 毎年多くの観光客で賑わいますが、 4 月の地震の影響で水を通す石管の接合部が破損。 放水できなくなってしまい、 町の農業や観光に大きな打撃を与えています。

そこで、 地元の若手農業従事者が集まり「通潤橋応援プロジェクトチーム」を発足。 地域の結束力を高め、 被災状況を広く知ってもらうことで修復のための支援を集めようと活動しています。

6 月に実施した「お田植祭」では 1000 人近くを集客し、 8 月 11 日の「山の日」のイベントも複数のメディアに取り上げられました。 橋周辺の草刈りや壊れた田畑を修復する援農ボランティアのマッチング事業なども続けています。

# 緊急即応体制を創る

大規模災害時の緊急即応体制を整えるためのさまざまな取り組みを行っています。メディア掲載やご協力いただいている皆様の関連情報もお知らせします。

緊急即応体制

## 袋井市の防災倉庫移転

Civic Force は、災害支援協定を締結している静岡県袋井市の防災倉庫を無償で借り、緊急災害時に備えた支援物資を保管しています。このたび、9 月の倉庫移転に伴い、スタッフ 2 人が物資の確認と整理を行いました。

2011 年の東日本大震災、今年の熊本地震では、災害直後に袋井市防災課の職員の方々の協力を得て、市内の防災倉庫から緊急避難テントや仮設シャワーなどの設備を届けました。

袋井市との協定のもと、防災倉庫には、テントやタンク、燃料、ドラム缶、ジェネレーター、パレットなど緊急災害時に必要な支援物資を保管

緊急即応体制

## 1 日 1 回 1 クリックするだけ

1日1回1クリックするだけで社会貢献につながります。

■「gooddo（グッドゥ）」
http://bit.ly/17Xr7N3

■PSC クリック募金
・東北支援
http://www.psc-inc.co.jp/clickdonation/index.html
・熊本支援
http://www.psc-inc.co.jp/clickdonation/kumamoto.html

A-PAD

## 洪水被害の村で医療支援

7 月末に降り続いたモンスーンの影響で、インドやバングラデシュ、ネパールなどで洪水の被害が相次いで発生しました。A-PAD バングラデシュは、8 月 5 日から被災者の救援活動を開始し、中部のマニクガンジ県の村で薬や水、食糧などの物資を配布するとともに、医者や看護師チームによる医療支援を続けています。

緊急即応体制

## 1 日 33 円から できることがあります

次の大規模災害に向け、平時から備えておくために、皆様の力が必要です。マンスリーサポーターとして、毎月定額（1000 円単位）をご寄付いただく形で、大規模災害にともに備えてください。

■銀行：三井住友銀行　青山支店　普通　6953964
■ゆうちょ：00140-6-361805
（上記いずれも口座名義は「ｺｳｴｷｼｬﾀﾞﾝﾎｳｼﾞﾝ　ｼﾋﾞｯｸﾌｫｰｽ」です）
■クレジットカード：HP「オンライン募金」をクリックしてください。
https://bokinchan2.com/civicforce/donation/bokin/page1.php?bokin_type=donation

※マンスリー・レポートおよびニュースレターのバックナンバーは、
http://civic-force.org/news/monthly/ からご覧いただけます。

CHECK!!
https://twitter.com/civicforce
http://www.youtube.com/civicforceorg
https://www.facebook.com/civicforce
http://www.civic-force.org/mailmag/

CIVIC FORCE